

『学校力向上に関する総合実践事業』コーナー その9

今月は、「外部アドバイザーによる指導・助言」について紹介いたします。

本校では今年度3回の外部アドバイザー研修会を計画し、9月・11月・12月に開催しました。

○平成27年9月29日（火）

東京大学大学院教授 市川 伸一氏による教育講演会

演題「教えて考えさせる授業」をどうつくるか ～教師の説明を理解深化につなげる～

習得サイクルと探究サイクルの関係性を示した上で、授業づくりのポイントはどこにあるかの説明を次のようにいただきました。



- 1 子どもにとって難しいところにこそ時間と工夫を（困難度査定）
 - ①指導書、教育書などの解説を利用
 - ②自らの学習経験や指導経験から
 - ③「子どものつもりになって」というイマジネーション
- 2 教える場面の工夫—コンパクトに重要な点を
- ①単なる要約でなく、教材や教え方を工夫
- 3 理解深化課題の工夫—課題のレパートリーを広く
- ①教科書の発展問題、教育雑誌などの活用
- ②教師の疑問／授業検討会で代替案を出す習慣

○平成27年11月4日（金）

函館市教育委員会学校教育部教育指導課長 加賀 重仁氏による教育講演会

演題「学校力向上の鍵」

今どきの子どもを「社会に出るまでお客様・喜怒哀楽が不明・基礎体力の低下・自然体験や社会体験が不足・関係づくりが不得手・規範意識の低下」と捉え、個に応じた指導の充実から「学校力向上の鍵」について次のように説明をいただきました。



1. 求められる授業像

現行学習指導要領では、「確かな学力」、特に「思考力・判断力・表現力等」を育み各教科等の目標を実現するための手立てとして、「言語活動の充実」について規定。

例えば、一斉授業だけではなく①ペアで意見を交換する②ホワイトボードを使って話し合う③付箋を使って話し合う。例えば、先生が説明するだけではなく①生徒が説明する②立場を決めて議論する③ポスター等を作成して発表する。そして、主体性や協働性が大いにかかわるアクティブ・ラーニングへ。

学校の主たる取組は授業改善であるべき。

2. 教育課程の正しい理解

「学年や学級の目標は、子どもの発達段階や実情に応じて、学校教育目標に到達するものになっているか。日常の授業は、学校教育目標の実現に向けた内容になっているか。」など、色々と計画される学校の教育活動は、適切な目標のもとに行われなければならない。

互いの考えを認め合い、高め合える学級は、学級満足度が高く、学力も高いと言われている。学級経営の力量が問われる教師は、「学校経営方針」を道しるべに教育課程を正しく理解し、主体性・能動性・協働性をもって教育活動を進めてほしい。

○平成27年12月18日（金）

北海道教育大学札幌校 教授 萬谷 隆一氏による教育講演会

演題「これからの小学校英語教育の教科化を考える」

言語教育・コミュニケーション教育は、「すべての教科を通じて重視する」ことが重要とされる中、これからの小学校英語教育の教科化について、次のように説明をいただきました。

1 基礎的活動の大切さ

現在の小学校外国語活動は、コミュニケーションの楽しさを体験する点で成果があるが、それを支える英語表現の下地づくりが不十分である。

2 基礎的指導のポイント

- ① 知らぬうちに、楽しく何度も
- ② 話す活動は、聞く活動をたくさんしてから
- ③ 覚えさせる工夫（リピートばかりでなく）
- ④ 授業をバラバラな活動の寄せ集めにしない
- ⑤ どこかでコミュニケーション活動を
- ⑥ アルファベットの慣れ（分かる、音にする、書く）
- ⑦ 十分に聞けて言えるようになってから、文字を読む遊びを

⑧ 書くことは、「読み遊び」の後で、少しずつ



3 これからの小学英语教育

- ①基礎的な語彙の指導を丁寧に
- ②コミュニケーション活動を基盤とする
- ③人とのかかわるためのコミュニケーション能力を育てる

しかし、覚えるだけの英語指導にならないよう、あくまで相手に言いたいことが伝わり、相手の言いたいことがわかる経験を子どもたちにたくさんさせることが大切です。どのような社会や時代が来ても、伝え合い、人とつながる力のある子どもを育てるため、小学校の英語は今、教科化に向けて、指導内容の充実が求められています。

今年度3回実施した外部アドバイザーによる研修会（公開研究会の講演を含む）には、管内外から大変多くの参加者があり、学校力向上の理念やよりよい学級経営、日常授業の改善のあり方等について共有することができました。

